

## 史跡 入江・高砂貝塚（入江貝塚）

入江・高砂貝塚（入江貝塚）は、大きな貝塚がある沿岸部の遺跡です。貝塚とは、捨てられた魚や動物の貝殻や骨が積み上がったものです。入江・高砂の貝塚は恐らく数百年にわたって形成されたものであり、最上層は紀元前約 2,000 にまで遡ります。この場所からは、多くの墓や竪穴建物跡が見つかっています。

この遺跡は、一般に公開されています。展示物には、土、貝殻、骨がある貝塚の一部の巨大な横断面や竪穴建物の立体模型などがあります。この遺跡は、入江・高砂貝塚（高砂貝塚）[\[リンク\]](#) や入江・高砂貝塚館 [\[リンク\]](#) から歩いて行けます。

### 海と貝塚

気候が温かくなってくると（紀元前 8,000 年～紀元前 5,000 年）、海面が上昇し、主な狩猟採集の場所は入江の浅瀬へと移動し、釣りや潮干狩りが発展していきました。先史時代の北部日本の集落は、このような生活手段にますます依存するようになり、大量の魚介類が消費されるようになりました。その結果、貝塚は集落の隣に形成されました。

考古学者たちは、貝塚を分析することにより、食生活が時とともに環境要因に応じてどう変わったのかを研究することができます。下層にあるハマグリやカキと、上層にある鳥貝（アサリ）は、水温と海水面の変化を示唆しています。入江・高砂貝塚（入江貝塚）では、集落の居住者たちは魚獲りと狩猟に依拠して食料を得ており、貝以上に肉と魚を食べるのが一般的でした。

公園の入口には、貝塚の 1 つの大きな断面図が掲示されています。この断面図は縦横数メートルで、さまざまな量の骨と貝殻を見ることができます。貝殻より骨が目立っており、オットセイ、イルカ、シカおよびその他の魚や動物の骨が含まれています。

### 釣り道具と交易

入江・高砂貝塚（入江貝塚）では、さまざまな釣り針が発掘され、魚獲りの道具がどう発達してきたかを示しています。より大型の組み合わせ針は、外洋での釣りが一般的だったことを示しています。この遺跡では、北海道産でない材料を使ったイノシシの牙の装飾具などの品が見つかっています。これらは、本州との海上交易があったことを裏付ける証拠だと考えられています。

この遺跡からの出土品は、入江・高砂貝塚館で展示されています [\[リンク\]](#)。入館料が必要です。基本情報の一部は英語で提供されています。